



# 私がアンデッド城で コックになった理由 2

山石コウ

Kou Yamaishi

Regina



レジーナ文庫

## セリアン公爵(双子)

ミア

人狼。弟と共に獣人たちの住む土地を治めている。  
辺境伯のことがお気に入り。

## リチャード

人狼。魔物の姫アリーヤと幼なじみで、彼女にストーカーじみた愛情を抱いている。



## レイン フォード卿

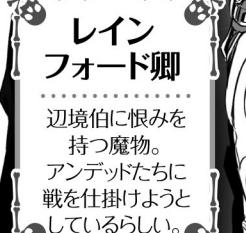
辺境伯に恨みを持つ魔物。アンデッドたちに戦を仕掛けようとしているらしい。

## ルイス

伝説の英雄。アリーヤと駆け落ちし、王の怒りを買って瀕死の重傷を負った。

## レベッカ

聖女と呼ばれる女性。魔物の姫アリーヤにそっくりな見た目をしている。



## リヨン

城の魔法使い。極度のナルシストだが、ユイのことは何かと助けてくれる。

## ハインリヒ

城のコック。ミイラのような外見とは裏腹に、優しく面倒見の良い男性。



## エルドレア 辺境伯

あるじ  
アンデッド城の主。食に対して凄まじい執念を持つ。初めは食材扱いしていたユイを、人として愛するように。

## 小川結

料理好きな元女子高生。異世界にトリップし、アンデッド(不死者)たちの城でコックをしている。

登場人物紹介

## 目次

私がアンデッド城でコツクになつた理由2

書き下ろし番外編

□マンチックにやり直し

私がアンデッド城でコツクになつた理由2

## 宵待ち×良い町

1

「ふんふんふふふーん」

鼻歌を歌いながら、フライパンの中でジュウジュウと音を立てる肉をくるりとひっくり返す。私は小川結は、ただいまお仕事の真っ最中だ。つい最近まで普通の高校生だった私が、こうしてコツクという仕事に就いているには少し特殊な理由がある。

ある日、私は買い物を終えて帰宅する途中で異世界へと迷い込んでしまった。わけも分からずトリップした先は、アンデッドばかりが住んでいるというエルドレア領。途方に暮れていたところを、領主であるアルバード・リード・エルドレア辺境伯に拾われ、人食いアンデッドたちとの共同生活が始まった。

食欲にまみれた目を向けてくる辺境伯に命の危機を感じた私は、彼とある約束を交わ

した。それは、『私が作る料理に満足したら、その日は私を食べることを我慢する』というものだ。結果、日本の家庭料理で彼の胃袋を掴むことに成功し、それから毎晩、命懸けで料理を作った。

初めのうちは自分の命を守るために料理を作っていたのに、いつしか辺境伯が『美味しい』と言つてくれるのを期待するようになつていて。そのときから、私は自分のためではなく、彼のために料理を作るようになったのだ。

今ではお互に想いを通わせ、私は辺境伯の恋人、兼専属コツクとしてこのアンデッド城で暮らしている。日本にいたときに比べると不便に感じることも多いけれど、なんとか頑張つていた。

ただ一つ、懸念が残るのは……：

「あのレインフォード卿が、やられたまままでいるはずないよね……」

ある雨の晩、レインフォード卿と名乗る人物がエルドレア城へとやってきた。彼は隣のレインフォード領を治めている貴族で、アンデッドたちを心の底から毛嫌いしている。そうとは知らない私は、レインフォード卿の罠にはまり、食材として調理されることになった。悪趣味な彼は、私を殺して辺境伯の反応を楽しもうとしたのである。

アンデッドのリヨンとリュシアンの機転で助かったけれど、辺境伯は私がレイン

フォード卿に殺されたと思つて激怒した。そして、逆らつてはいけない相手であるはずのレインフォード卿に刃を向け、追い返してしまったのだ。

見ると、近いうちに何か仕掛けてくるはずだ。

思考に没頭していた私は、フライパンから立ち上る焦げた匂いに気づき、慌てて肉をひっくり返した。

「まずいまずい。もうちょっとでハンバーグが真っ黒になることだつた」

辺境伯用に作った特別サイズのハンバーグは、私の顔よりも大きい。それを手早く五枚焼いて、あらかじめ熱しておいた鉄板の上に盛りつける。ジュワッと撥ねる肉汁の音と共に、食欲を刺激する香りが調理場いっぱいに広がつた。

外はしつかり焼き目をつけて、中はふつくらジューシーに。ナイフを入れたら肉汁がどつと溢れ出て、口に入れれば柔らかく解れてしまう。きっと辺境伯にも気に入つてもらえるはずだ。

付け合わせは人参そつくりのアルカンという野菜のグラッセに、インゲンによく似たパセオルのバターソテー。この二つはハンバーグには欠かせない。

「そつちの料理はもう完成したみたいだな。俺のほうはもう少しかかるから、先に閣下

のところへ持つていっててくれ」

ハインリヒが巨大な鍋をかき回しながら、私のほうを振り返つた。干し柿のようにカラカラに干からびた彼の肌には深い皺が刻まれていて、眼窩には黒々とした影が落ちている。鼻は削げているし、唇はひび割れてガサガサだ。

一目見ただけで悲鳴を上げてしまいそうな相貌だが、彼は人情味があつて面倒見もいい。とつぜんアンデッド城に連れてこられた私を不憫に思い、弟子してくれた先輩コックだ。彼に指導してもらつたおかげで、私は使い慣れない調理器具や食材もだいぶ上手く扱えるようになつていて。

「ありがとうございますハインリヒさん。それじゃあ、お先に行つてきます」

私は配膳の支度を整えて食堂へ向かつた。

日が沈んだあと、エルドレア城は薄暗い。燭台の上で頗りなく揺れる炎だけでは、廊下を隅から隅まで照らし出すことはできない。そのため、薄気味悪い影があちこちにできあがる。

だが、アンデッドたちにとつては、これからが活動時間本番だ。

アンデッドたちは日の光に当たると、力の弱い者ならたちまち灰になつてしまふ。だから、彼らは昼間のうちには光の入らない自室で眠り、日が沈んでから目を覚ますのだ。

「おはようございます」

食堂の扉を開き、既に席に着いていた辺境伯のもとへワゴンを押していく。辺境伯は真っ赤な髪を指で弄びながら書類に目を通してはいる。ハンバーグの匂いを嗅ぎつけると、嬉しそうに顔を上げた。

「ああ、おはよう。今日の料理も美味そ<sup>うだな</sup>」

彼はテーブルに広げていた羊皮紙や手紙の束を脇へ退け、ワゴンの上の料理を熱っぽい瞳で見つめている。

その後ろに控えていた執事のリュシアンが、音も立てずにワインボトルの栓を抜き、辺境伯のグラスに真っ赤な液体を注いだ。灰色の長い前髪から覗く瞳は冷ややかで鋭い。おまけに、口元をまつ白なスカーフで覆い隠しているので、表情が読み取りづらい。

けれど、決して機嫌が悪いわけではないらしい。その証拠に、リュシアンはワインボ

トルを傾けながら、私に向かつて小さく礼をした。

「おはようござります、リュシアンさん。今日もワインを選んでくださつてありがとうございます」

「いえ。それが私の仕事ですから」

食前のワインを選ぶのもリュシアンの仕事のうちなので、私はその日に作るメニュー

をあらかじめ彼に伝えておくことにしてはいる。そうすれば、料理にぴったりのワインを選んでくれるのだ。

リュシアンはグラスにワインを注ぎ終わると、一札してから食堂を出ていった。普段であれば辺境伯が食べ終わるまで後ろに控えているのに、今日はなんだか忙しそうだ。私は気を取り直して、テーブルに置いたハンバーグに手早くソースをかける。熱い鉄板に触れたソースがジュワジュワと音を立てた。刻んだネギを入れた醤油ベースのソース。その甘辛い香りが立ち上つて、食欲を刺激される。

「今夜はハンバーグをお持ちしました。鉄板が熱いでお気をつけください」

辺境伯はナイフとフォークを手に取ると、さっそくメインのハンバーグを口に運ぶ。

彼はいつも、一番食べたいものから迷いなく手をつけるのだ。目を閉じてゆっくりと咀嚼し、口元を綻ばせた。普段笑うことの少ない彼も、このときばかりは満足そうな笑みを浮かべる。

「美味しい」

「ありがとうございます。お気に召したようで嬉しいです」

13 私がアンデッド城でコックになった理由 2

特大サイズのハンバーグが、たったの二口で鉄板の上から消えてしまう。もつとじつくり味わつてもらいたいなと思うけれど、辺境伯が喜んでいるなら、まあいいかな。

「ご馳走さま。今夜の料理も美味かつた」

辺境伯はものの五分で五枚のハンバーグと付け合わせを完食した。ナイフを置いてナ  
キンで口元を拭うと、テーブルの端に避けていた書類を引き寄せる。

「最近、とてもお忙しそうですね」

空になつた鉄板を片付けながら、私は辺境伯に声をかけた。仕事の邪魔になるかもしれないと思つたけれど、のめり込むように書類と向き合う姿を見ていたら、言わずにはいられなかつたのだ。

「そうだな。私もさすがに少し疲れてきたが、どうしても片付けなければならない案件が立て込んでいる。まったく、頭の痛いことだ」

辺境伯は書類に目を落としたまま、疲れた様子で首を回した。骨が軋む音が激しく鳴る。人体から出ではいけないような音だったが、彼は気にしたそぶりも見せずにミシミシとやつっていた。

以前から顔色の悪い辺境伯だったが、最近はさらにやつれているように見える。アンデッドが過労で倒れたりすることはないのかもしれないけれど、無理をしている姿を見るのは辛い。

「根を詰められているようなので心配です。私にもお手伝いできることがあれば、なん

でも仰つてください」

辺境伯は書類から目を離し、少し考えるように私を見上げる。そして、蝶人形のように血の氣のない手で手招きする。私はそれに従つて、トコトコと歩いていった。

「ここに座つて」

そう言つて辺境伯が指し示したのは、彼の膝の上だつた。

「えつと……そこに、私がですか？」

予想外の指示に困惑する。辺境伯の膝の上に座ることが、お手伝いに繋がるとはとても思えない。けれど、彼は真剣な顔つきで大きく頷いた。

「そうだ。あまり時間が取れないから早くしてくれ」

あつと言つて手を取られた私は、辺境伯に背を向ける形で膝の上に座つた。彼の要望だから仕方ないけれど、本来なら不敬にあたる体勢なんじやないだろうか。

びくびくしながら膝の上で固まつていると、辺境伯の腕が伸びてきて、私のお腹の前に回された。そして、彼の額が私の肩にコツンと当たる。

「はあ、やはりユイは温かいな」

赤い髪とひんやりしたため息が、私の首をくすぐつた。すぐ後ろから低い声で囁かれ、驚いて立ち上がりそうになつてしまつたが、唇をぎゅっと結んで耐える。

「柔らかくていい匂いがする。お前が側にいてくれるだけで疲れが癒やされる」

一瞬、私を抱く辺境伯の腕に力が入ったが、それ以上は何もすることなく、そつと離れていた。肩に感じていた重みも、ゆっくりと消えていく。

「ありがとう。ユイのおかげでだいぶ気持ちが楽になつた」

振り返ると、辺境伯は穏やかな微笑を浮かべて私を見ていた。自分の顔が、かあつと熱くなるのを感じる。

「わ、私、もう調理場に戻らないと！」

辺境伯の懐からするりと抜け出し、急いで残りの食器を片付けた。そして、彼と視線を合わせることなくワゴンを押してペコリと頭を下げる。

「失礼します！」

私は逃げるよう食堂から飛び出した。扉を閉めたあと、ようやくホツと息を吐く。どうしてこんなに辺境伯を意識してしまうんだろう。以前ならなんとも思わなかつたはずなのに、彼のちょっとした動きや言葉が気になつて仕方がない。

少し落ち込んでいたところへ、ハインリヒが皿と巨大なステップ鍋を持って現れた。彼は私を見て怪訝な表情をする。

「なんだ、真っ赤な顔してどうした？」

「な、なんでもありません。ほんと、なんでもないので気にしないでください」

ハインリヒの追及を逃れるために調理場へ戻り、使い終わつた食器を片つ端から洗い場に突つ込む。

ああ、焦つた。拳動不審などころを見られたから、ハインリヒに変に思われたかもしれない。でも、好きな人にあんなことをされて平然としていられるほど、私の恋愛経験値は高くない。

首筋に触れた辺境伯の柔らかな髪や、私を包み込んでもまだ余裕のある広い肩幅なんかを思い出すと、一度引いたはずの熱がまた戻つてくる。

「はあ……恋愛つて難しい。私はつかり焦つて上手くいかないよ。どうしたらもつと余裕を持てるんだろう」

「んー分かってないね、フリカッセちゃん。余裕なんて保てないほど心乱されるのが恋愛の醍醐味なんじゃないか」

とつぜん、後ろから声をかけられ、私は驚いて振り返つた。調理場の戸口から、真っ赤な薔薇の花束を抱えたりヨンがこちらを覗いている。

彼はため息が出るほど美しい顔立ちをしているのに、紫色の肌の上には深い傷跡と、それを塞ぐための黒い縫い目がジグザグに走つている。その美貌と醜い縫い目とが相

まつて、アンバランスながらも奇妙な魅力があつた。

魔法使いでもあるリヨンは、夜な夜な自分で育てた薔薇の花を城内のあちこちに飾つ

ている。彼曰く、辛氣臭い城を少しでも華やかに見せたいらしい。

「悩みがあるなら、僕に相談してみなよ。力になれると思うよ？」

リヨンがこちらに近づいてくると、薔薇の香りが調理場にふわりと広がる。彼が自ら

品種改良した薔薇は、普通のものよりもずっと強い香りがするのだ。

私は食器を洗う手を止めて、気まずい気持ちでリヨンの顔を見上げた。

「リヨンさん、いつからそこにいたんですか？」

「少し前かな。フリカツセちゃんのため息が聞こえてきたから覗いてみたんだ」

リヨンは私を『フリカツセちゃん』と呼ぶ。彼の大好物の料理の名前らしい。何度も改

めるようにお願いしてもそう呼ばれるので、もう最近はフリカツセちゃんと呼ばれても普通に返事をしている。まだ名前を覚えていないわけではなく、あだ名で呼ぶのは彼なりの親愛の証らしい。

「なんでもないんです。だから、どうか今の独り言は忘れてください」

「それは無理。どうやらフリカツセちゃんは、閣下への接し方に悩んでいるみたいだね」

リヨンはずばりと核心を突いてきた。

私はこれ以上ごまかすこともできず、こくりと頷く。

「それじゃあ、いいことを教えてあげるよ。明日の宵、外に出て北の空を見上げてごらん」

「その時間に何があるんですか？」

リヨンはもつたいたつけた動作で人差し指を立てると、天井を指差した。薔薇の花束を

持った彼がそんな仕草をすると、映画や舞台のワンシーンのように見える。

「星が降ってくるんだよ。それも、数え切れないほどたくさんの星がね。僕の故郷では、降つてくる星を捕まえることができたら幸せになれるっていう言い伝えがあるんだ」

「本当に捕まえることができるんですか!?」

私は目を輝かせた。この世界には魔法が存在する。だから、流れ星を捕まえることだってできるのかもしれない。

しかし、リヨンは笑いながら首を横に振った。

「あはは、そんなわけないじゃないか。ただの言い伝えだよ。でも、明日は本当に美しい星空が見られるはずなんだ。綺麗な星を閣下と一緒に眺めたら、少し自分の気持ちに素直になれる気がしない？」

リヨンは意味深な顔で目配せしてくる。辺境伯を誘つてみろということなのかもしれない。

「私だつて、そんなに綺麗な流れ星なら辺境伯と一緒に見たい。でも……」「閣下はお忙しいので、誘つても断られるかもしれません。それに、私のわがまままで仕事の邪魔をしたくないです」

「君は本当に真面目とというか、馬鹿というか……」

リヨンは残念な子を見るような目をしてため息を吐いた。あまりにもしょっぱい顔をするので、頬に走る縫い目が引きつる。

「閣下を誘う口実なんていくらもあるじゃないか。遠くから見守るだけじゃなくて、たまにはわがままを言つて閣下に甘えてみたら?」

「でも、ご迷惑になるかもしれないと思うと、どうしても声をかけるのをためらつてしまつて……」

「君も意外に頑固だね。うーん、じゃあ外でも食べられるような手軽な料理を作つて、それを口実に誘うつていうのはどう? それなら閣下も喜ぶだろうし誘いややすいだろ」私はリヨンの提案に、なるほどと手を叩いた。単なる私のわがままではなく、辺境伯にも楽しみがあるなら誘いやすい。

「リヨンさん、ありがとうございます。思い切つて閣下をお誘いしてみます」「うん、そうしてみるといいよ」

リヨンは薔薇の花束を持ったまま、手を振つて調理場から出ていった。どうやら、ちょっとと雑談をしに来ただけらしい。

「明日の夜か、楽しみだな」

私は腕まくりをし直して、食器洗いを再開した。

後片付けを終えた私は、他にもできる仕事はないかと、城内をふらふら歩いていた。いつもならハイシリヒが明日のメニューの相談に乗ってくれるのだが、今日は用事があると言つてどこかへ行つてしまつたのだ。

最近、城内がやけに騒がしい。みんな日課の仕事とは別の仕事で、入れ代わり立ち代わり外出している。普段はいかに仕事をサボろうかと思案しているアンデッドたちが、まるで別人のように引き締まつた顔をしているのだ。

何があったのかと尋ねてみても、彼らは答えを濁して去つてしまう。それ以上無理に聞くことができないので、私はこの件には触れないようにしていた。

城の掃除でもしようかと思つていたところへ、サリーが足早に歩いてくるのが見えた。彼女は城で働くメイドで、長い栗色の髪をツインテールにし、大きな瞳が特徴的な美少女だ。

「こんばんは、サリーさん。これからお掃除ですか？」

サリーの両腕には、モップやバケツがたくさんぶら下がっていた。でも、これから掃除に向かうにしてはやけに急いでいるのが気にかかる。

彼女は私に気がつくと、スカートの裾をたくし上げ、ものすごい速さで走ってきた。私の鼻先でサリーの興奮した目が見開かれる。

「ユイさん！　いいところで会いました」

サリーは掃除用具を床に置き、私の手をギュッと握った。その手は冷たくて紫色をしているけれど、美少女に手を取られて一瞬ドキッとしてしまう。

驚いていた私に一切構わず、サリーは小さな顔をますます近づけてくる。そして至近距離でパチパチと瞬きを繰り返した。

「私の代わりに、城の掃除をやってくださいませんか？」　実は用事ができて、これから町へ出なければならないんです」

よほど急いでいるのか、サリーは早口で捲し立てる。体を揺らすたびにツインテールも揺れるのが微笑ましいけれど、その表情は必死だ。

「もちろんいいですよ」

私は快く引き受けた。困っているときはお互い様だ。ちょうど仕事を探していると

ころだつたし、誰かの役に立てるならなお嬉しい。

安心したのか、サリーは強張<sup>こわば</sup>ついていた肩の力を抜いた。

「ありがとうございます。今夜は玄関ホールの辺りを重点的に掃除したかったんですね」

階段の裏まで、みつくりお願いしますね」

お礼を言うと、サリーは瞬く間に走り去った。さすが、掃除と洗濯に命を懸けているだけある。昔、廊下を汚した辺境伯を叱り飛ばしたことは有名な話なのだそうだ。

私はサリーが置いていった掃除用具を手に、さつそく掃除を始めることにした。玄関ホールを中心に戸と戸の間で、まずはその辺りにある調度品の埃を払う。

落ちた埃を箒で掃き集め、床にモップをかけていると、階段の裏側から微かな風が吹いてきた。

なんだろう、廊下の窓は全部閉まっているから、風なんか吹き込んでくるはずないのに。風の出所が気になつた私は、不思議に思いつつそちらに行つてみる。すると、階段のちょうど真裏にあたる場所に、膾脂色の分厚いカーテンが引かれていた。

どうしてこんなところにカーテンがあるのだろう？　重たそうなカーテンを少しだけ捲つてみると、そこには人が一人入れるくらいのスペースがあつた。窓もないし、部屋と呼ぶには狭すぎる。

「変なの。まあいいか、それよりお仕事お仕事」

踵きびすを返して戻ろうとしたそのとき、手に持っていたモップの先をうつかり踏みつけた。水で濡れたモップは床を滑り、私はバランスを崩して後ろに倒れる。踏みとどまることができず、背後の壁に思い切り背中を打ちつけてしまった。

「痛たた」

尻もちをついていると、とつぜんガタンという音がして、寄りかかつてた壁が動き出した。一度動き出すと最後まで止まらない仕組みになっているのか、壁は奥へ奥へとどんどん動いていく。

「これって隠し通路？」

私の喉のどがごくりと鳴った。目を凝こらしてみても、中は真っ暗でよく見えない。ヒュウという微かな音がして、風が通路の闇に吸い込まれていく。その風に背中を押された気がして、私は一步前に出た。まるで誰かが私を呼んでいるみたいだ。

壁に手をついて、ゆっくりと暗闇の中を進む。少しづつ目が慣れてくると、辺りの様子が分かってきた。通路の壁は滑らかな石ででき正在して、城内の壁とほとんど変わらない感触だ。空気も湿つてはおらず、私の後ろから急かすように風が吹いてきても、不思議と恐怖は感じなかつた。

前方に一筋の光が見えると、私の足は迷わずそこへ向かう。暗闇の終点では扉が待ち構えていた。

耳元でまたしてもヒュウと風が鳴つて、目の前の扉の中に吸い込まれていく。まるで風に誰かの意思が宿っていて、私を促うながしているかのようだつた。

「これを開けろってこと？」

誰とも知れない不思議な気配に話しかける。なぜかは分からぬけれど、この扉の奥に行かなければならぬ気がした。

ドアノブに触った瞬間、指先にビリッとしたものが走る。静電気だらうか？ 濡度の高いエルドレアでは、一度も静電気なんて起きたことがなかつたのに。

ドアノブをしっかりと握り、力を込めて押してみる。意外にも扉は簡単に開いた。<sup>すき</sup>隙間から漏れ出てくる光に目を細めながら、ゆっくりと中へ入つていく。

「うわあ……」

思わずため息がこぼれた。目の前には、青白い月明かりに照らされた部屋がある。床も壁も、天井までもが白く塗られているせいか、明かり一つないのに不思議なほど光に満ちていた。

正面の壁の高い位置に、ステンドグラスのような色付きのガラス窓があり、そこから

柔らかな月光が降り注いでいる。

部屋の中央にはどつしりとした石の台座と、その上に真っ白な石像が置かれていた。それ以外めぼしいものは見当たらない。

私は夢でも見ているような気持ちになつて、恐る恐る石像に近寄つてみた。どんな石でできているのだろう。滑らかな肌の質感や、髪の毛の一本一本までもがはつきりと分かる。今にも動き出しそうな石像だ。

それは、鎧を纏つた逞しい男の像だった。

何かを掴み取ろうとしているみたいに空中に手を突き出し、苦しみとも悲しみとも取れる切ない顔をしている。

私は石でできた男を見上げながら首を傾げた。

「この人、どこかで見たことあるような……」

偉業を成した人物を模るのは、こちらの世界でも珍しいことではないらしい。信仰の証として、神やその眷属の像を作ることも多いと聞いている。もしかしたら、この像も宗教的なものなのかもしれない。そう考えると、この部屋は礼拝堂に似ている気がする。誰がどんな目的で作ったのかは分からぬけれど、勝手に立ち入つていい場所ではなさそうだ。石像に背を向けて戻ろうとしたとき、私の耳元をまた風が通り抜けた。



私は慌てて振り向く。恐ろしい気配は感じないが、誰かに呼ばれている気がしたのだ。

「もしかして、私をここまで連れてきたのはあなたなの？」

まさかと思いながらも、石像の瞳をじっと見つめる。凜々しい目元や、それを縁取る睫まで精巧に造られた像が、一瞬本物の人間に見えた。

急に胸が締めつけられたように苦しくなる。どうしてこんな気持ちになったのかは分からぬけれど、悲しくて悲しくて仕方がない。

私はその場に立ち尽くしたまま石像を見上げていた。白くて滑らかな手に触れたいと思ふのに、体が震えて思うように動かない。

『あなたを決して死なせはしないわ』

『やめるんだ、アリーヤ』

とつぜん、頭の中で誰かの声が響いた。それと同時に、目の前に一人の男の姿が浮かび上がってくる。まるでプロジェクターで映し出された映像のようだった。男は石像と同じ顔をしていて、全身に酷い傷を負っている。わき腹の辺りからは真っ赤な血が流れ出し、立っているのがやつとといった様子だ。

吐く息には激しい苦痛の色が混じっていて、今にも崩れ落ちそうだ。それなのに、こちらに向かって必死に腕を伸ばしてくる。そのポーズが、目の前にある石像の姿にぴた

りと重なった。

『お願いだからやめてくれ！』

苦痛に喘ぎながら懇願する男の喉が、みるみる裂けて真っ赤な血が滴る。その叫びを

最後に、男の姿はスッと消えてしまった。

私はいつの間にか涙を流していた。とても恐ろしい光景だったはずなのに、恐怖ではなく悲しみが溢れてくる。胸が苦しくて震えが止まらない。いつたいどうしてしまったのだろう……

『誰かいるのか！』

「なぜユイガここに？」

彼は驚いている様子だったが、私が石像の前で涙を流しているのを見て顔色を変える。

『どうやってこの部屋に入った！』

いつになく険しい表情で近づくと、辺境伯は私の肩を両手で掴んだ。ぐつと強く掴まれ、肩に痛みが走る。

私は辺境伯の取り乱した姿に驚き、肩の痛みも忘れて彼を見上げた。鋭い牙をむき出しにして睨みつける辺境伯。そんな顔をされるほど悪いことをしてしまったのかと、私

は申し訳ない気持ちで俯いた。

「すみません。掃除をしている最中に扉を見つけて、特に鍵もかかっていなかつたので、中に入つてしましました」

辺境伯の剣幕にすっかり萎縮してしまい、目を合わせることができない。それでも反省している気持ちを分かつてもらいたくて、謝罪の言葉を口にした。

しかし、いくら待つても辺境伯からの返事がない。不思議に思つて顔を上げると、彼は信じられないというような目で私を見ていた。

「鍵もかかっていなかつた、だと？」ここにはアリーヤ以外誰も立ち入ることができないよう、不可侵の魔法をかけていたというのに……。本当にお前が一人でこの扉を開けたのか？」

「はい。でも、魔法なんてかかつたなかつたと思ひます。ドアノブを回したら、扉はすんなり開きました」

そのときのことを思い返しても、特に抵抗らしいものは感じなかつた。しいて言えば、エルドレアでは一度も起きたことのない静電気を感じたくらいで――

思つたままを伝えると、辺境伯の目がさらに見開かれた。

「まさか、ユイがそうだというのか……」

「閣下？」

辺境伯の様子がおかしくなつた。さつきまでは怒りを露わにしていたのに、今は何かに脅えて青ざめている。彼が呟いた言葉を聞き取ることはできなかつたけれど、大変なことしてしまつたということだけは分かる。

「ごめんなさい。もう二度とここへは来ません」

そう言つて頭を下げた私を、辺境伯がとつぜん引き寄せ、息もできないほど強く抱きしめた。視界が塞がれて何も見えなくなる。この部屋もあの石像も、もう見ることは許さないと言われている気がした。

「ここには二度と来てはいけない。ユイには関係のない場所だ」

抱きしめられている私には、彼の顔を見ることができない。でも、その声は今にも泣き出しそうなほど震えていた。

しばらく一人で寄り添つていたあと、辺境伯はそつと私を解放する。

「出よう。この部屋にユイを長く置いておきたくない」

私にはよく分からぬことだらけだが、辺境伯の言葉におとなしく頷いた。

追い立たれるように隠し部屋を出していく直前、私はそつと後ろを振り返つた。月光を浴びた白い石像は、静かにそこに立つてゐる。もう、不思議な風は吹いてこなかつた。

辺境伯と二人で真っ暗な通路を歩き、階段の裏へと戻ってきた。彼の眉間に、まだ深い皺が刻まれている。

「今夜ここで見たものは、誰にも口外してはならない。どうか、ユイの胸の内にしまつておいてくれ」

「……はい。分かりました」

私たちの間に重苦しい空気が流れる。暗く沈んだ雰囲気を打ち破るために私は顔を上げた。

「あの、一つお願いがあります。明日の夕食は食堂ではなく、外で召し上がりませんか？」

「食事を外で？」

突拍子もない私のお願ひに、辺境伯が首を傾げている。少し唐突すぎたかもしだいが、私は大きく頷いて説明した。

「はい。実は明日の宵に流れ星が見られると、リヨンさんから教えてもらつたんです。もしよかつたら、その時間に合わせて食事をしませんか？」

私は勢い込んで提案したけれど、辺境伯は眉を寄せた。

「明日は城の者たちと城下へ行く予定になつてゐる。残念だが、食事の時間は取れそうもない。悪いな」

辺境伯は申し訳なさそうに言う。でも、私はまだ諦めない。

「では、私もお供させてください。お願ひします、ほんの少しでもいいのでお時間をもらえないでしようか」

辺境伯に近づき、両手を組んでお願ひのポーズを取る。これで駄目ならきつぱりと諦めるつもりだ。

そのままじつと様子を窺つていると、辺境伯は仕方がないなど言わんばかりにため息を吐いた。

「分かった。明日、日が沈んだらすぐに迎えに行く。それまでに外出の準備をしておいてくれ」

「はい、ありがとうございます！」

嬉しい。ちょっと強引だったかもしれないけれど、これで辺境伯と一緒に流れ星を見られる。おまけに、一緒にお出かけするという約束もゲットできた。

喜びを抑えきれない私を見て、辺境伯もようやく表情を緩めてくれた。

「ユイには敵わないな」

私の頬を冷たい手がするりと撫でる。

んなことをするのは許さないぞ」

辺境伯は食事のときとは違う熱っぽい視線を私に送り、そのまま仕事へと戻っていく。私はといえば、彼に触れた頬を押さえて固まつたまま、その後ろ姿をぼんやりと見送つていた。

「……閣下のほうが、よっぽど性質たちが悪いです」

硬直が解けて動けるようになるまで、少し時間がかかつてしまつた。玄関ホールの掃除はあらかた終わつていて、廊下に散らばつたままになつていた掃除用具を片付けて、今夜はもう自室に戻ることにする。

与えられた部屋に戻り、お仕着せのメイド服から寝間着に着替えてホッと一息吐いた。私は元々、察しがいいほうではない。推理小説を読んでも犯人が誰なのか最後まで分からぬし、含みのある言い方をされても言葉通りに受け取つてしまう。でも、あの石像が誰なのかはもう分かつっていた。

「きっとあれは、フイーリアの英雄ルイスなんだろうなあ」

四百年前、魔物の姫アリーヤと恋に落ちた人間のルイス。彼は魔物の王の怒りを買って石にされてしまつたが、いつか必ず戻つてくるというアリーヤの言葉を信じ、エルドニア城で彼女の帰りを待つているのだ。

以前、リヨンに貸してもらつた本には、そんなことが書かれていた。

「ルイスは、本当に今でも石になつたまま、あの部屋でアリーヤを待つてゐるんだ……」

偶然ルイスを見つけてしまつただけの私がこんなことを言うのはおこがましいけれど、彼を安置している部屋が闇に閉ざされていくなくてよかつたと思う。ルイスが四百年という長い間、真っ暗な部屋で孤独な時間を過ごして、アリーヤが知つたら、きっと悲しむんじゃないだろうか。

なぜ辺境伯があの部屋に入ることを禁じているのか気になるところだが、彼と約束したからには、今夜の出来事は誰にも話せない。私一人の胸の内にしまつておこう。

どうせ考えたつて分からない。それなら、余計なことをごちやごちや考えず、眠つてしまつたほうがいい。そう思つた私は静かに目を閉じた。

私は静かな森の中を気の向くままに歩いていた。目的地があるわけではなく、ただの気晴らしのための散歩だ。踏みしめた草は柔らかく、暖かな木漏れ日が心地よい。どこ

かで小鳥のさえずりが響いている。

森の香りを胸いっぱいに吸い込んで大きく伸びをした。ここはなんて気持ちがいいところだろう。

しばらく歩くと、森の奥に湖が広がっているのが見えた。日の光が湖面にキラキラと反射して眩しい。

私は湖を目指してさらに進んだ。やがて、底が見えるほど透明な湖が目の前に現れる。手のひらで水を掬つてみると、ひんやりと冷たい。私は身につけていた衣服をその場に脱ぎ捨て、水の中へと静かに入つていった。

小さな魚が私を避け泳いでいくのを見ながら、手足を思い切り伸ばして水中へ潜る。気持ちいい。今までの窮屈な生活の疲れが、嘘みたいに癒やされていく。

水面に顔を出したとき、すぐ近くから馬の嘶く声と草を踏みしめる足音が聞こえてきた。こんな森の奥まで来る人がいることに驚いて、私は辺りを見回す。

すると、岸辺に真っ白い馬を連れた鎧姿の男が現れた。

彼も自分以外の者がいるのに驚いたのか、目を大きく見開いている。

私は湖の中に立ち尽くしたまま、声も出せなかつた。男が身につけている白銀の鎧と、短く刈られた金色の髪が日差しを浴びて、まるで彼のものが光を放つているかのよう

に見えたのだ。

何より目が離せなかつたのは、彼のスカイブルーの瞳だ。私はその瞳を見つめたときから、一瞬たりとも目を逸らすことができなくなつていて。しばらく無言で見つめ合つたあと、男はとつぜん我に返つたように頭を横に振り、私が視線を外した。

「す、すまない。人がいるとは思わなかつた」

男は上ずつた声でそう言い、くるりと後ろを向いて立ち去ろうとする。

「待つて！」

私は慌てて声をかけた。自分が衣服を身につけていないことなんて、まったく気にならない。彼の視線を独占できるなら、この先一生服など着なくてもいいとさえ思つた。急いで湖から上がり、ずぶ濡れのまま彼を追いかけ、その大きな背中を捕まえる。「私はアリーヤと申します。どうか私をあなたの妻にしてください！」

男は驚いて振り返り、真っ赤な顔でスカイブルーの目を見開いた。

い出し、ホツと胸を撫<sup>ななな</sup>で下ろす。

「夢か……」

まさか自分がアリーヤになつた夢を見るなんて思つてもみなかつた。それに、さつきの夢はリアルすぎて、本当に湖でひと泳ぎしてきたみたいな倦怠感<sup>けんたいかん</sup>がある。

ベッドから這<sup>は</sup>い出て窓を開けると、生ぬるい風が吹き込んできた。昼間のエルドレアは、瘴氣<sup>しょうき</sup>という名の分厚い雲に包まれている。灰色の雲越しに太陽を見つけた私は、両手を上げて伸びをした。

夢の中のアリーヤは、目鼻立ちがはつきりしていて、肌の色が透<sup>す</sup>き通るように白かつた。艶<sup>つや</sup>のあるダークブラウンの髪は腰まで届き、どこからどう見ても美しい女性だった。夢に出てきたアリーヤが本物のアリーヤに似ているのかは分からなければ、隠し部屋で見たルイスの石像の隣に並ぶなら、あのくらい美人なほうが絵になる気がする。

「私もあんなふうに生まれついてたらなあ」

そんな儂<sup>はかな</sup>い願望を呟<sup>つぶや</sup>きながら、クローゼットの扉を開けてお仕着せのメイド服に着替える。鏡に映つているのは、まだ少女といつても差し支えない自分の姿。童顔な上に背が低いので、実年齢よりもだいぶ幼く見えてしまう。

日本人の私でさえそう思うのだから、容姿が欧米人に近いエルドレアのアンデッドた

ちから見れば、どれほど幼く見えるのだろう。

そんなことより今は仕事だ。私は自室から出て、城の裏手にある井戸へと向かう。エルドレア城の一日は、まず水汲<sup>く</sup>みをしなければ始まらない。何をするにも水は必要になるし、起きたらすぐに顔も洗いたいからだ。

夜のお出かけのためにも、昼間のうちにできるだけ夕食の仕込みをしておきたい。ゆつくり星を見る時間はなさそうだけれど、そのあと城下へ行つたときにでも、軽食を差し入れできたらと思つていた。

私は水を汲みながら、何を作ろうかとじつくり考える。

辺境伯が好きな肉を使って、なおかつ持ち運びしても形が崩れないものを作りたい。外で食べるから道具が要らないくらい簡単に食べられて、冷めても美味しい料理がいいだろう。

うーん、意外と難しい。お弁当みたいなものを作ろうかとも考えたが、まず辺境伯が満足するほどの量が入る弁当箱はない。それに、日本で作つていたお弁当はお米ありきで考えていたので、白米がないとしつくりこない。

ああでもない、こうでもないと唸りながら、私は水を汲んだバケツを持って調理場へとやつてきた。隣の部屋で眠つてているハインリヒを起こさないよう、そつと窓を開けて

光を入れる。すると、調理台の上にたくさんの茶色い塊かたまりが置かれていることに気づく。

「なんだろうこれ?」

それは、見事な山形やまがたに盛り上がった食パン二十斤さんだつた。一つ一つが私の指先から肘ひじまでの長さである。ここでパン屋でも始めるつもりなのかと疑うほどの量だ。

調理台の上にハインリヒのメモが置いてあつたので、それを読んでみる。

「えーと、『間違つて大量に仕入れちまつた。無理を言つてすまないが、少しでも量を減らすために、できるだけ料理に使つてほしい。ハインリヒより』……まさかの発注ミスなんだ、これ」

エルドレアの主食はパンだ。辺境伯もパンを食べることが多いけれど、ハインリヒが城でパンを焼くことはない。やつてできないこともないと彼は言うが、城下にはそれを専門にしている職人さんがいるらしく、そこから仕入れている。

パン職人は私が眠つたあとにやつてくるので、直接顔を合わせたことはない。でも、一気に大量の食パンを作らされたその人も、さぞ大変だつことだろう。

「ハインリヒさんがミスするなんて珍しいな。最近忙しそうだから、疲れが出たのかな?」 彼も他のアンデッドと同様、コック以外の仕事で出かけることが増えていた。私の知らないところで、様々なことが動き始めているらしい。何も教えてもらえないのは少しも往復することにした。

寂しいけれど、私は自分にできる仕事を頑張るだけだ。

「あ、そうだ。ちょうどいいメニューがあるじゃない」

大量の食パンを消費てきて、なおかつお出かけに最適なメニュー。

「サンドイッチを作るう!」

そうと決まればすぐに行動に移す。私はサンドイッチに必要な肉や野菜を取つてくるため、氷室ひむろに向かつた。異世界と地球とでは食材はだいぶ違うが、ハインリヒの指導のおかげで、一人でも食材を選ぶのに困ることがほとんどなくなつたのだ。

レタスにそつくりな緑色の葉野菜ラクチアに、トマトのように赤いソリムの実。それからキヤベツに似たカピタという葉野菜を箱から取り出し、たくさんの卵と一緒に籠かごの中に入れる。あつと言ふ間に籠がいっぱいになつてしまつたので、調理場と氷室を何度も往復することにした。

今日は挽き肉を使わないので、さらに奥へと進み、目に止まつた牛肉の塊を手に取る。それは脂肪分が少なく、つやつやした綺麗な赤身の肉だつた。

「今日は時間がいっぱいあるから、手の込んだ料理にしてみようかな」

野菜たっぷりのサンドイッチだけだと、肉好きな辺境伯には軽すぎるかもしれない。何より、野菜だけではスペシャル感が薄い。

「よし、ローストビーフを作ろう」

冷めても美味しい肉料理といえば、ローストビーフだ。むしろ冷めたほうが美味しいし、スライスしたローストビーフを挟めば、ぐつと豪華なサンドイッチになりそうだ。巨大な牛肉の塊を、調理しやすい大きさに切り分けてから籠に入れる。以前の私は肉を切ることに嫌悪感を覚えてしまつて、包丁を入れることさえできなかつた。けれど、最近は少しづつ挑戦している。

自分の命が危険に晒されなくなつたからか、以前ほど肉を切るのが怖くなくなつていった。それに、いつまでもハインリヒに頼つてばかりいられない。他にもハムやチーズ、それからバターといつたサンドイッチには欠かせない食材を選び、最後に玉ねぎによく似た味と食感を持つアリウムを籠に入れた。玉ねぎみたいに丸い形をしているけれど、皮も中身も濃いオレンジ色をしている。もちろん生で食べても美味しい。

私は集めた食材を持って調理場へと戻り、食パンの山を前に気合を入れた。これは作

り甲斐がある。たくさん作つておけば、他のアンデッドたちにも食べてもらえるかもしない。今夜は領内のアンデッドたちが城下町に集まることになつてゐるらしいので、ちようどいい。

「よおし、頑張るぞ！」

さつそくローストビーフの下準備に取りかかつた。塩、コショウ、にんにくに似た風味のサティーブをすりおろして、牛肉全体によく擦り込んでおく。

そして油を引いたフライパンで、焦げ目がつく程度に焼く。焼き上がつたら、バナナの葉に似たミューサの葉で包んだ。この葉で包むと熱が逃げないので、余熱でじっくり火を通すことができるのだ。それをフライパンに戻したら、あとは肉に味が染みるのを待つだけだ。

その間に他の食材に取りかかる。まずはマヨネーズにそつくりなマニエールソースを作り。以前これを作つたときはコツが分からず失敗してしまつたが、リュシアンのアドバイスのおかげで、今では上手に作れるようになつた。

洗つておいたラクチアの水分をよく拭き取り、一口大の大きさにちぎる。パリパリとちぎれるその感触まで、レタスとまるで変わらない。キャベツに似たカピタは千切りにして、塩コショウ、元の世界から持つてきたガーリック

クパウダーで味を調えながら炒めておく。トマトによく似ているソリムはラクチアに挟んでサンドイッチに入れれば、パンに水分が移らない。塩気の多いハムは少し薄めに切り、卵をふわふわに焼き上げてから、チーズをサンドイッチ用に薄くスライスした。

具材が揃ったところでパンを取り出す。一晩置いていたせいか、表面が硬く中まで乾燥している。このままサンドイッチにしても、モソモソとした食感になってしまって美味しいだろう。

私は戸棚の奥からトースターを取り出した。それは鉄製のフライパンを二つ組み合わせたような形で、取っ手の部分を持ち上げると二枚貝みたいに口が開く。この中にパンを挟んで両面焼けば、外側はカリッと、中はふんわり柔らかくなる。

とりあえず、試しに一枚焼いて味見してみた。

「うん、こうすれば美味しい」

歯ざわりはサクツとしているのに、中は見事にフワフワだ。小麦の素朴な風味と、ほんの少しの甘みも感じる。嬉しくなった私はどんどんパンを切って焼いていった。

焼き上がったパンにはバターとマニエールソースをたっぷりと塗る。黄色い卵とレタスに似たラクチアを載せ、スライスしたチーズとハム、トマトにそつくりのソリムも挟

んだ。パンの熱でチーズがとろりと溶け、それがまた食欲をそそる。

せつせとサンドイッチを作り続け、お昼を過ぎたころには、調理台の上にサンドイッチのタワーがいくつも立っていた。

「さて、そろそろスペシャルサンドを作つてもいい頃合いかな」

私はフライパンの蓋を開けて中身を確認する。ローストビーフを取り出してまな板に載せ、端を薄くスライスしてみると、外側から中心にかけて綺麗な赤い色をしていた。味見をしてみれば、しつとりと柔らかく仕上がってていた。にんにくのほのかな香りが口の中に広がる。後からコショウのピリッとした刺激が来て、ついもう一枚と手が出てしまうほど美味しい。

これで最後と自分に言い聞かせつつ、再びローストビーフを口に入れる。幸せだ、これこそ幸せの味だと思う。ローストビーフを口いっぱいに頬張ると、人は幸せになれるのだ。

薄く切ったローストビーフには、専用のソースを絡ませておく。これは玉ネギに似たアリウムをすりおろして醤油と砂糖、しょうがに似たジンギルとガーリックパウダーを加えて、ひと煮立ちさせたものだ。少し薄めの味付けにしておいたので、パンに挟んで他の具材と一緒にしても、喧嘩しない味に仕上がるはず。

私はさつそくローストビーフを、レタス代わりのラクチアと一緒にパンの中に挟む。肉はたくさんあるから分厚いサンドイッチを作ろう。みんなの顎よ外れてしまえ！と心の中で念じながら、景気よく肉を使つた。一度、こんな贅沢なサンドイッチを作つてみたいと思っていたのだ。

最後に、できあがつたサンドイッチを食べやすい大きさに切れば完成だ。

「ああ、もうこんな時間！」

窓から差し込む光が、いつの間にか茜色に変わつていて。朝から一人で頑張つた甲斐があり、調理台の上にあつた二十斤のパンをすべて使い切つていた。

そこで大変なことに気づく。この大量のサンドイッチ、どうやつて運べばいいんだろう……

「おう、今日も早いな。つて、なんだこりゃ！」

ちょうどいいタイミングで、隣の部屋からハインリヒが起き出してきた。彼は私が作ったサンドイッチタワーを見て軽く引いたらしく、呆れた表情で調理台の上を眺めている。「ハインリヒさん、おはようございます。仕入れすぎたパンを使ってサンドイッチを作つてみました」

私は胸を張つて答えた。

「食パンを全部使つてくれたのはありがたいが、これはどう見ても作りすぎだろ。いつから作業してたんだ？」

「ええと、朝起きてすぐ取りかかりました

ハインリヒがさらに呆れた顔をする。

「今夜は皆さん、城下町に行くんですよね。実は私もついていくことになつたので、そのとき差し入れしようと思つたんです。でも……このサンドイッチをどうやつて運ぶかまったく考えていなかつたから、ちょっと困つていたところなんですよ」

何しろ慎重に運ばないと、すぐに形が崩れてしまう。一人分ずつ包んでいる時間はなし、こんなにたくさんの中身のサンドイッチに入る袋なんて、そう簡単には見つからない。

ハインリヒは腕組みしながら考え、やがて不本意な様子で口を開いた。

「仕方ねえ、リヨンに相談するか。あいつならなんとかするだろ」

ハインリヒに呼ばれてやつてきたリヨンは、サンドイッチのタワーを見るなりブツと噴き出した。

「これ、フリカッセちゃんが一人で作つたの？」

もう遅い。ばつちり聞き取つたらしいハインリヒとリヨンは、驚いた顔で私を見つめていた。

「なんだ、腹減つてゐるのか？」

「フリカツセちゃん、自分のご飯はどうしたの？」

「……実は食べてません。サンドイッチを作ることに夢中で、すっかり忘れていました」  
リヨンが堪えきれないといった様子で顔を逸らした。口元を手で隠したところで、小刻みに揺れている肩を見れば、笑つているのが一目で分かる。私は馬鹿にされていると感じて、少し口を尖らせた。

「私のことはいいんです。あとで余り物を食べますから」

「こんなにたくさん作つたんだから、少しぐらい自分で食べちゃえばよかつたのに。さがにあの閣下でも、これだけの量を一人では食べきれないと思うよ」

「それは駄目です。だって、このサンドイッチは最近忙しそうにしている皆さんへの差し入れでもあるんですから。本当は皆さんのお仕事を手伝いたかったんですけど、私にできるのは料理を作ることだけなので」

私がそう答えると、リヨンは大きく目を開いた。その表情がみるみる崩れて、泣き出しそうな笑顔に変わる。

「ありがとうございます。君は本当に、馬鹿みたいに優しいね」  
馬鹿は余計だと思つたけれど、私は何も言わなかつた。リヨンが照れたように視線を逸らしているのが、なんだか新鮮に思えたから。  
「このサンドイッチはちゃんと城下町に持つていくから、あとは僕に任せてくれいいよ」

「ありがとうございます、リヨンさん」

「それより、そろそろ閣下が出かける時間だ。こんなところでのんびりしていいのか」「あ、そうでした！」

ハインリヒの言葉に、私は慌てて空を確認した。太陽が西の空を赤く染めながら、地平線の下へ沈み込もうとしている。辺境伯は日が沈んだらすぐ迎えに来ると言つていた。「腹が減つているなら、氷室で何か果物でもつまんでいけ。閣下と一緒にいるときには虫が鳴つたらまずいだろ」

調理場から飛び出す私に、ハインリヒがそう声をかけてくれた。たしかに、辺境伯にお腹の音を聞かれるなんて恥ずかしすぎる。私は果物を求めて一度氷室に寄つた。  
「ええと、果物の棚はこっちにあつたはず」  
ブドウに似た果物の実をいくつか手に取り、行儀が悪いのを承知でそのまま口に入れ

る。足元でカタンという音がしたのでそちらへ目をやると、棚の陰から小さな影がいくつも出てきた。とんがり帽子に白い髪<sup>ひげ</sup>を生やした彼らは、氷の妖精ジャックフロストだ。

「驚かせてごめんなさい。欲しいものはもう見つけたので、すぐ出ていきます」

軽く会釈をして出ようとした私に、ジャックフロストたちはトコトコと歩み寄つてきた。珍しいなと思つてその様子を眺めていると、さらにたくさんジャックフロストたちが集まつてくる。

ああ、そうだつた。この妖精は集団で行動するんだつた。

私の周りをぐるりと取り囲む妖精たちを少し恐ろしく感じながら、彼らが何をしようとしているのか、じっと観察する。

すると、後ろのほうから他のジャックフロストよりも明らかに髪<sup>ひげ</sup>が長くて立派なジャックフロストが現れた。よく見れば、かぶつっている帽子も若干長くて色が違う。

彼が現れたとたん、ジャックフロストたちはさつと道を空けた。きっと彼がこの群れのリーダーなのだろう。リーダーは私の足元まで来ると、おもむろに口を開いた。

「もうすぐレインフォードとの戦<sup>さん</sup>が始まりますぞ」「え？」

「恐らく、ここエルドレアの地が戦場になるでしょう」

一瞬、何を言われたのか分からなかつた。でも、ジャックフロストはたしかに『戦』と口にした。私は彼らの話をよく聞くため、その場にしゃがみ込んだ。

「もしかして、レインフォード卿<sup>きょう</sup>がこの前の雪辱<sup>せゆく</sup>を果たしに来ようとしているんですか？」

私もレインフォード卿のことはずつと気にかかつていて。あの雨の晩、一応はおとなしく引き下がつたけれど、彼は辺境伯への恨みをさらに募らせていく。爬虫類<sup>はちゅうるい</sup>を思わせる執念深<sup>うねう</sup>いな目をしたレインフォード卿が、仕返しをしないなんてありえない。

「左様です。レインフォード卿が攻めてくるのです」「どうして、ここが戦場になると分かるんですか？」

「辺境伯は大義名分<sup>おおぎめふ</sup>がなければ、己<sup>おのれ</sup>から戦<sup>たたか</sup>を仕掛けることができないのです。初めの一撃<sup>いっげ</sup>は甘んじて受けねばなりません。それ故に、ここが戦場と化すのです」

ジャックフロストの話を聞いて、城のみんなが忙しそうにしているわけがようやく分かつた。きっと、彼らは私を怖がらせないよう、何も知らせずに戦う準備をしていたのだ。

「人間のお嬢さん、実は我々からあなたにお願いがあるのです」「どんなことですか？」